

<「知るっば!久留米」 令和2年11月5日(木) 12:30~放送分>

## 久留米絣 ～第1回～ 久留米絣と井上傳

<ゲスト：(公財)久留米絣技術保存会 丸林 禎彦さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

11月は、久留米の伝統産業であります『久留米絣』をテーマにお送りしていきます。

ゲストは、この方です。

ゲスト:丸林 禎彦さん (以下「丸林」)

(公財)久留米絣技術保存会の事務局次長をしております、久留米市文化財保護課の丸林です。

重要無形文化財である久留米絣の伝統的な技術を保存する仕事をしています。

よろしくお願いします。

坂本 よろしく申し上げます。

久留米絣の第1回は、『久留米絣と井上傳』をテーマにお送りしたいと思います。

久留米絣の歴史はおおよそ200年前の江戸時代にまでさかのぼるそうですが、

まずは久留米絣の起源について教えてください。

丸林 江戸時代の寛政11(1799)年に、久留米絣は井上傳(いのうえでん)によって考案されたといわれています。

実は、この久留米を中心とした筑後地域には、それ以前から基盤となる藍(あい)染めの文化が深く根付いていたんです。

記録によると、筑後地域は原料となる藍の一大生産地で、九州の藍染めはほとんどがこの筑後藍を使用していたそうです。

つまり、絣の発明以前からこの久留米周辺では、藍染めの織物が盛んに作られていたんですね。

坂本 なるほど。絣より先に藍染めがあったということなんですね。

丸林 そんな中、当時13歳のひとりの少女が、使い古して部分的に色落ちした藍染めの着物を見て、「面白い!」と思ったわけです。

通外町の米屋の娘として生まれた井上傳は、6~7歳の頃から機織り(はたおり)を始めて、

この頃には大人も驚くような織り手になっていたといわれています。

坂本 わずか13歳で歴史に残る発明をしたということですけど、昔の子供って立派ですね。

具体的には、どんな感じで久留米絣を發明していったのでしょうか？

丸林 井上傳は、まず着古して所々白くなった布地をほどいてみました。  
そして、藍染めの糸の一本一本に藍色の部分と白く色が抜けている部分があることに気づきました。  
そこで伝は、『先に糸を染めてから織ったらどうなるのだろう？』と考えたのです。  
実際にやってみると、所々白い斑点がはいつた、今までになかった織物ができたんです。  
伝のこの新しい織物は、“雪降り”であるとか“あられ織り”などと呼ばれて、大好評を博しました。  
そうなると、今度はこの白い斑点をコントロールして何とか柄にできないかという工夫が始まるわけです。  
近所に住んでいた現在の東芝の創始者のひとりで、東洋のエジソンとも称される“からくり儀右衛門・田中久重(たなかひさしげ)”も伝の相談に応じて協力したといわれています。

坂本 久留米絣は郷土の偉人たちが、今でいうコラボレーションして段々と発展していったんですね。

丸林 そうなんです。  
伝は、自分の技術を惜しみなく伝えており、一時は1000人を超える弟子がいたそうです。  
そのうち400人ほどが久留米藩の各地に散らばって機織り業を始めました。  
これによって久留米絣は、久留米藩領内に広く伝わって地域を代表する産業になっていったんです。  
その後、大塚太蔵(おおつかたぞう)による絵絣の發明や牛島ノシによる子絣など多くの人々の工夫と改良によって、現在の巧緻(こうち)で美しい久留米絣が出来上がってきたんですよ。

坂本 一人の女性(伝さん)からものすごい大産業に発展したというのは、すごい歴史を感じますね。  
久留米絣というのは、その名前は誰でも知っていると思うんです。  
でも、その特徴は何かと聞かれると、ちょっと説明できなかつたりすると思うんですよ。  
久留米絣を一言で説明するとどうなりますか？

丸林 久留米絣は先染めの織物です。  
複雑な柄を表現していくうえで、織りあがった布に着色するのではなくて、糸の段階で柄になる部分を染め分けて、機(はた)の上で再構成していくことから、とても複雑で緻密な計算が必要となるため、とても手のかかる織物なんです。  
絣の柄はキャンバスに絵を描くというよりも、パーツを組み合わせて絵にしていくイメージに近くて、糸一本一本の微妙なズレが柄に陰影を与えて、絣独特のかすれたような味わいを生み出します。  
特に、久留米絣では経(たて)糸にも緯(よこ)糸にも絣糸を使い、経緯(たてよこ)が合わさった部分にくっきりとした白が入る経緯絣(たてよこがすり)が最も特徴的です。

坂本 なるほど、わかりました。  
久留米絣は、キャンバスに柄を描くというよりも、パーツを組み合わせて柄を生み出すというところに絣の魅力を改めて実感できました。

ちなみに、久留米絣というのは品質がとても高いとお聞きしていますが、絣の品質は、どのように保たれているのか教えてください。

丸林 実は、久留米絣が高い品質水準を維持できているのは、明治の初めに起きたある出来事が関係しています。

久留米絣は、江戸時代の終わりには久留米藩を代表する特産品のひとつになっていました。明治10(1877)年の西南戦争の際には、たくさんの官軍兵士が久留米に立ち寄り、土産物として、こぞって久留米絣を買い求めて、空前の久留米絣ブームが起きました。

坂本 その当時、久留米絣がかなり流行ったんですね。

丸林 絣は飛ぶように売れていたのですが、品薄状況の中でどうしても品質が落ちてしまい粗製乱造(そせいらんぞう)という状態が起きてしまったのです。

それまでデザインと品質を売りにしていた久留米絣の評判は、全国的に地に落ちてしまいました。

坂本 ブームになると粗製乱造が起きるとするのは、歴史的にも繰り返されていますからね。

丸林 ただ、久留米絣はそこで諦めずに、信用失墜と悪評を憂いた国武喜次郎、本村正平など有志が立ち上がったのです。

それまで、商人や仲買人が、個人の織元と直に取引を行う仕組みだったのですが、それを廃止しました。

そして、原材料と製品規格の統一や製造販売を組織化し、織元、染元、販売元の責任を明らかにして、3種類の責任商標を貼り付けるなどの取り組みを始めました。

明治19(1886)年には、久留米絣同業組合が設立されて、生産者は全てこの組合に加盟し、厳しい品質管理を行うことになりました。

さらに、明治32(1899)年には、久留米絣鑑定所を域内の40か所に設置するという全国でも類を見ない厳しい仕組みを作り上げて、検査の向上と不正の締め出しを行ったわけです。

こうして、久留米絣の信用は確固たるものになっていったのです。

現在でも久留米絣業界は、140年以上前の教訓を忘れず信頼性の高い製品を生産し続けているんですよ。

坂本 なるほどですね。いろんな人のご苦労や知恵、工夫があって今日があるということですね。

丸林さん、大変興味深いお話をありがとうございました。

久留米絣に関する質問やお問い合わせについては、

歴史・重要無形文化財の伝統的な技術に関することは、久留米市役所本庁舎12階久留米市文化財保護課内にある(公財)久留米絣技術保存会までお願いします。

電話番号は、0942-30-9322です。

また、久留米絣の販売など全般的なことにつきましては、地場産くるめにあります久留米絣協同組合までお願いします。

電話番号は、0942-44-3701 です。

次回は『久留米緋の今』をテーマにお届けします。

丸林さん、来週もよろしくお願いいたします。